灰谷健次郎の保育園日記

灰谷健次郎

新潮文庫

灰谷健次郎の保育園日記

新潮文庫　は－8－10

平成二年二月十五日　印刷
平成二年二月二十五日　発行

著者　灰谷健次郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

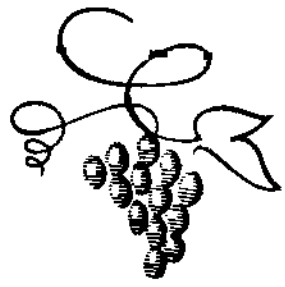
印刷・東洋印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Kenjirô Haitani 1985　Printed in Japan

ISBN4-10-133110-3 C0137

新潮文庫

灰谷健次郎の保育園日記

灰谷健次郎著



新潮社版

4404

灰谷健次郎の保育園日記

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

〈本文写真撮影〉

P39～42、P71～74、P96～99……御子柴滋

P100、P126～130、P161～165、P195～199……小学館『幼児と保育』編集部

目

次

素晴らしき出会いから……九
手づくり保育園、産声をあげる……一七
よく学びよく遊び……二四
激浪の中、舳先を立てて……三一
子どもを見つめる、自分を見つめる……四三
Tくん、好きよ……五〇
いのちを食べる……五七
動物たちがやってきた……六四
苦悩のむこうの世界はだれにも見えない　I……七五
苦悩のむこうの世界はだれにも見えない　II……八二

苦悩のむこうの世界はだれにも見えない　III……八九
ぼく、ここの保育園すき……一〇一
ピアノはじゃまかもしれない……一一三
ヨーイドンどこまでかけていくのかな……一一八
きよちゃんが泣くから泣きやもうね……一三一
言葉がポトリポトリと落ちていく……一三九
顔のはなしと新しい仲間……一四六
カミナリ、あっちへいけ……一五三
それぞれの夏、それぞれの人生……一六六
きよこちゃんの涙と笑い　I……一七三

きよこちゃんの涙と笑い II……一八〇
きよこちゃんの涙と笑い III……一八八
ぞうさんのハナクソどこにあるの……二〇〇
長く、そしてまた短くも——あとがきにかえて——……二〇九
解説　正村公宏

素晴らしき出会いから

子どもを真ん中にしてなにかおもしろいことをやりたいというのが、ぼくたちが保育園をやりはじめるきっかけだった。

ぼくたちというのは、ぼくを除くと保育生活二十九年のベテラン東条義子、『一年一組せんせいあのね』（理論社）の著者で小学校教師の鹿島和夫、同じく小学校教師で『たいようのおなら』（サンリード）の著作がある岸本進一、そして画家の坪谷令子である。

鹿島は小学校教師を生涯つづけるつもりだから直接の参加は無理で、いわば準同人というところである。

ぼくたちに共通していたところは、いずれも、こんにちの学校教育のはみだし教師だった点である。

もちろん、そんなことを得意気にいっているのではない。

現場にいるとき、ぼくも坪谷もしんけんに子どもと向き合ってきたし、他の三人は今もなお、それぞれの教育現場で奮闘している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東条は沢野勇というよき師に恵まれ先進的な幼児美術の実践家としてすでに名があった。大学のときから絵をかきつづけ、二十代後半で画家として独立した坪谷は、とうぜんのことながら美術教育に熱心だった。

岸本は大学時代、アルバイトのつもりではじめたクラブまわりのバンド演奏でその腕をきたえられている上、クラシック音楽に造詣が深く、その音楽感覚は抜群のものがあった。

鹿島とぼくは作文教師として、児童詩教育にとりくんできたという経歴がある。

鹿島はすぐれた児童詩教育の実践家に与えられる北原白秋賞を受け、ぼくは児童文学作家としての道を歩んだ。

そういうふうに書いていくとおのずと明らかになることだが、こんにちの知育偏重や能力主義の跋こする日本の教育の中では、ぼくたちは結局よけい者なのだった。

もちろん向こうがいくらぼくたちをよけい者にしても、ぼくたちは子どもと共に信じる道を歩んだことはいうまでもない。

しかし、ぼくたちはいつも疲れていた。

子どもたちといっしょに何かをするときは楽しかったが、その楽しいことをするまでに、いくつもの意味のない苦労をしなければならなかった。

その苦労の中には校長や教頭との対立もあれば、仲間の教師への気づかいもあった。

だからというわけでもあるまいが、ぼくたちはいつもユートピアを夢見ていた。教育の中

のユートピアとはいったい何なのだろうと、漠然とではあるがいつも考えていたのである。

保育所の設置が本決まりとなり、それをぼくたちの手で創造することが可能になったとき、その夢の実現をまっ先に考えたとしても、だれもぼくたちを楽天主義者と非難しないだろうと思った。

ぼくたちはそのユートピアを「太陽の子保育園」と名づけた。

一つの保育園が誕生するまでには、おそろしく煩雑な手続きとこまかい仕事がある。それはそれで、いい意味でも悪い意味でもこんにちの日本の政治、行政、市民意識等が反映していておもしろいので、次の章くらいで詳述してみるが、ぼくたちが最初に考えたことは、ぼくたちと真に志を同じくする仲間が得られるかどうかであった。

太陽の子保育園の人的規模は決まっていて子どもは〇歳児から六歳児まで、百二十名。保母十五名〜十七名である。

ぼくたちは十五名を三等分する構成を考えた。

一つは東条をはじめとする最初から同志的に参加を表明している者（この中には夫婦で東京の幼稚園に勤め、市民オーケストラのメンバーでもある、かつてのぼくの教え子などがいる）、一つは全国からの公募、もう一つは地元の保育専門学校、短大の卒業生である。

なぜこういう構成にしたかということを一言でいえば、地域、年齢、生活経験等あらゆる意味での多面的な出会いを望んだからである。

ぼくたちは専門誌『幼児と保育』に次のような広告を出した。

わたしたちは、つぎのような理念を持った新しい保育所をつくろうとしています。

1、保育の理念の達成を、一方の献身によって果たそうとするのではなく、幼いいのちの成長に添おうとするすべての人々の叡智（えいち）と、誠実な実践によって共に学び合う世界をつくろうとする。

2、鋭い感受性を持った芸術家としての子ども、深い人間愛を身につけようとする生活者としての子ども、そのかけがえのないいのちが表現するよろこび、かなしみを共有することによって、共に生きる美しい人間集団を創造しようとする。

いうなら子どもを中心にした真に人間的な共同体をつくりたいのです。対等で自由で、楽天的で前進的な広い意味での遊び場とでもいえばいいでしょうか。そこで生きることの意味を考え、学び、そして共に語り合うことができればと思うのです。

たったこれだけの文章で何ほどのことがわかってもらえるものでもなかろうし、応募をしてくださる方も不安を感じたことだろうが、それでも最終的に二百名を超す人たちが応募してくださった。

「わたしの家族とわたしの人生」という原稿用紙五枚の作文が、ぼくたちの意志と、志を寄

せてくださった方の意志のたった一つのつながりだった。
ぼくたちはそれを何回も何回も精読した。
そこに若者の苦悩があり、ほのかな希望があり、「生」へのひたむきさがあり、ぼくたちは感動した。
それをここに公開することができれば、どれほど素晴らしい感動を人に与えることができるかと残念でならないほどである。
しかし、そういう思いが強ければ強いほど、ぼくたちは人を選ぶということが苦しくてならなかった。
何人かにしぼり面接するという方法をぼくたちは放棄した。
五つの文章は五人の人間である。それが出会いだとぼくらは考えて五人の人を決めた。
熊本（くまもと）、西条、豊中（とよなか）、宮津、草津、とそれぞれの地からその人たちは淡路島のぼくの家を訪ねてくれた。
いっしょに酒を飲み、海に遊んで仲間であることを確認し合ったのである。
新卒者と呼ばれる若い人たちはそれと同じ方法をとることができなかった。
きわだった個性を文章から読みとるにしては一、二の例を除いて生活年齢があまりに浅かったからである。ぼくたちはやむなく、だれもが二度とやりたくないという面接会をもった。

人が人を選ぶということは一つの大きな罪悪だとこのときほど思ったことはない。ぼくたちは保育理念に、……対等で自由で、とうたったのである。何が対等で何が自由だ。選ばれる側に立ってみろ、どこに自由があるんだ。そういう叫びがきこえる。

ぼくは自分が中学を出て、いくたび就職試験を受けてもそのつど落とされたときの屈辱を思った。

ぼくはまともに若い人の顔が見られない思いだった。

その夜、ぼくは酒を飲んで吐いたことがないのに、二十数年ぶりで嘔吐（おうと）した。よく日、岸本に電話をすると、きょうは学校を休んでいる、夜中に吐きつづけたと苦しげな声でいった。ぼくたちは元気のない声で笑った。

太陽の子保育園で働く保母たちに忘れてもらいたくないことがある。

――あなたたちが今あるのは、多くの人の悩みや苦しみの上にあると。

苦渋に満ちて生まれてきたとしても、生まれてきたものは祝福されなくてはならないということばは、太陽の子保育園の保母たちにも贈ってあげたいと思う。

どの人もそれぞれに個性があり、この保育園にやってくる大きな必然があるのだが、それらは許される範囲内で、これからのこの保育園日記でおいおいにお伝えしたい。

それにしても出会いというものの素晴らしさ、不思議さを今さらながらに思わずにはいられない。

今は仮にその人の名をSさんとしておこう。

Sさんはことし保育専門学校を卒業して、太陽の子保育園で働くことになっているのだが、他の新卒者にくらべて年齢が二歳上である。

Sさんは保専に入学する以前、二年間、有名な化粧品メーカーのチャームガールとして働いていた。

変わった経歴といわねばならないのだが、なぜという疑問の中にSさんのうつくしくもけなげな人生が隠されていた。

Sさんのことばによると、Sさんは高校生のときマニキュアをしピアスをつけ長いスカートを引きずって歩いていたそうだ。

ぐれるにはぐれる理由があったのだが、チャームガールという職業も教師にすすめられるまま投げやりな気持ちでその職についたという。

どんなにつっぱっても満たされない空虚なものがSさんを支配する。こんな自分はほんとの自分でないという気持ちが、逆境のときやさしくしてくれたひとりの保母を思い出す。

Sさんはそのとき、ぼくの『兎の眼』を読み衝撃を受けたと語る。

そこからSさんの再生がはじまるのだが、その意思を三年間持続したSさんのその強靭な精神にぼくはただ敬服するばかりである。

Sさんにすればよくぞぼくが保育園をひらいてくれたと、神の意思をみるような気がした

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com